

The Freewoman から *The Egoist* へ

“*The Freewoman*,” “Spinster to the Rescue” by Rebecca West 試訳

From *The Freewoman* to *The Egoist*

Japanese Translation of “*The Freewoman*,” “Spinster to the Rescue” by Rebecca West

出水純子

Junko Demizu

キーワード：ジェンダー、女性学、フェミニズム、モダニズム、ジャーナリズム、レベッカ・ウエスト

Keywords: Gender, Woman Study, Feminism, Modernism, Journalism, Rebecca West

Summary

The Freewoman is an essential text for the study of the woman movement, gender, modernity and modernism. This journal went through three phases: *The Freewoman* (November, 1911-October, 1912), *The New Freewoman* (June, 1913 – December, 1913) and *The Egoist* (January, 1914- December, 1919).

The Freewoman was founded by Dora Marsden, a graduate of Manchester University who was one of the fighting suffragettes under Mrs. Pankhurst. Marsden found that she could no longer accept the discipline of the Pankhursts' the Women's Socialist and Political Union (W.S.P.U.), because Marsden was discontented with the limited scope of suffragist movement. Departing from W.S.P.U., she started the paper with wider vision of cultural and philosophical feminism. Marsden is, in her terms, 'a modern feminist' rather than a 'suffragette.' She introduced discussion of sexuality, women's dependency in marriage, motherhood made compulsory by the state, free love and individualism. She wrote in the first number of the journal that 'Our journal will differ from all existing weekly journals devoted to the freedom of women... Our interest is in the *Freewoman* herself, her psychology, philosophy, morality and achievements, and only in secondary degree with her politics and economics.'

Marsden encouraged debate between contributors and readers and open

forums were often held inviting Mrs. Havelock Ellis, Dr. Drysdale, etc. as lecturers. *The Freewoman* 'had an immense effect on its time,' to use the expression of Rebecca West, who was the literary editor of the journal. 'The correspondence' column shows that *The Freewoman* had subscribers abroad in the feminist communities in New York and Chicago. Many influential figures supported the journal including H.G. Wells, Stella Browne and Dorothy Richardson.

The Freewoman, the origin of the modernist journal *The Egoist*, formed a significant part of modernity in the making in the early twentieth century.

In this paper the transit process from *The Freewoman* to *The Egoist* is explained quoting the Japanese translation of Rebecca West's essays: "*The Freewoman*," and "Spinster to the Rescue."

はじめに

The Freewoman はモダニズム文学雑誌である *The Egoist* の出発点となった雑誌であり、フェミニズムの視点からモダニズムを見直す上で、英文学・文化研究に不可欠な資料である。20世紀初頭、女性参政権運動が激しさを増す中で、この雑誌を創刊したのはドーラ・マーズデン (Dora Marsden, 1882-1960) (図1) である。マンチェスター大学で哲学を専攻したマーズデンは戦闘的女性参政権運動家のパンクハースト夫人と運動をともにしていたが、女性の解放は参政権獲得に限るものではなく、「生」と「性」の問題でもあると考え、雑誌メディアの分野で新たな運動を起したのである。雑誌の副編集長を務めたのはメアリー・ゴースープ (Mary Gawthorpe) というフェミニストで、彼女も女性の社会・政治連盟 (W.S.P.U.) の過激な運動家であった。ゴースープは、ヨークシャー出身で教員経験や、週間 *The Labour News* の女性欄の記事を書いたり、*Votes for Women* の編集経験も持っていた。創刊号から副編集長を務めたものの、マーズデンの W.S.P.U. へのあまりにも激しい攻撃記事に反発し、第17号で副編集長を辞し、その後は寄稿者として投稿を続けた。

The Freewoman は、*The Freewoman: A Weekly Feminist Review* として1911年11月に出発し、1912年5月に *The Freewoman: A Weekly Humanist Review* と副題が変更された。同年9月に新聞・雑誌販売業者である W.H.Smith and sons のボイコットで業界から締め出され、また出資者も姿を消したので第47号 (10月10日号) で出版を中断せざるを得なくなった。1912年9月5日号 (図2) の記事 "Notice to the Readers of *The Freewoman*" でその経緯が説明されている。最終号となった第47号の社説のタイトルは "Our Last Issue" となっており紙面も通常の半分の10ページのみである。多数の投稿者からの手紙を読者欄に掲載できなかったことに対する、次のお詫びの文章が最後に付け加え

られている。

NOTE.—Owing to the limited space available in this issue, we regret to be compelled to omit letters from E.M.Watson, E.d'Auvergne, C. H. Hunt. Frances Prewett, A.R. Fairfield, M. Gawthorpe, F. W. Stella Browne, E. A. Pittuck, Ford Madox Hueffer, Rebecca West, Greeve Fysher, Huntly Carter.

フェミニズムの立場からモダニズムを見直す批評家のスコット (Bonnie Kime Scott) は、*Refiguring Modernism, Vol.I* の中で、*The Freewoman* が財政的に破綻した時、マーズデンを支援した人として以下の著名人の名前をあげている—H.G.Wells, May Sinclair, Amy Lowell, Dorothy Shakespeare (later the wife of Ezra Pound), Brigit Patmore, H.D., Katherine Mansfield, Charlotte Perkins Gilman, Dorothy Richardson and Charlotte Payne-Townshend (the wife of George Bernard Shaw. (p.43)

上記の引用文に掲載された人物名と、スコットの指摘する人物名を見てみると、社会改革者 (フェビアン協会) のH. G. ウェルズやバーナード・ショー、モダニスト作家のK. マンスフィールド、ドロシー・リチャードソン、C. P. ギルマン等の名前が列記されていて、当時の女性運動が社会・政治運動やモダニズム運動と関わっていたことが窺える。

多くの支援者の中で、実際の救世主はハリエット・ショー・ウィーヴァー (Harriet Shaw Weaver) であった。資産家のウィーヴァーは、*The Freewoman* に掲載されたアーサー・キットソン (Arthur Kitson) の金融論に関する記事で、「働かずを得た収入」は高利貸しが得る収入同然だと、シェイクスピアの『ベニスの商人』のシャイロックの名前を出してまで非難した内容に同意して、*The Freewoman* の事務所に財政的支援を申し出てきたのであった。ウィーヴァーは、後に *The Egoist* の編集長となりジェームス・ジョイス (James Joyce) を支援して彼の『若き日の芸術家の肖像』と『ユリシーズ』を連載し、この雑誌を有名なものにした女性である。

ハリエット・ショー・ウィーヴァーの財政的支援のお陰で、1913年6月に *The New Freewoman: An Individual Review* (図3) と改名されて再出発することができた。やがてこの雑誌は徐々にフェミニストの手を離れてイマジストやモダニスト作家の作品を掲載するようになり、1914年1月には、リチャード・オールディントン (Richard Aldington) が編集に加わって *The Egoist: An Individual Review* (図4) に発展するという経緯をたどった。

これら三代にわたる雑誌の文芸欄の編集に加わっていたレベッカ・ウエスト (Rebecca West) によると *The Freewoman* は「その時代に計り知れない影響を与えた雑誌」であ

る。このことは読者欄にかなりの紙面が費やされていたことや、誌上での議論にあきたらず、オープン・フォーラムがしばしば開催されていて、ハヴロック・エリス (Havelock Ellis) の夫人が優生学について講演したり、ドライズデイル (Dr. Drysdale) が新マルサス主義について論じたりしていたことから分かる。ウエストは当時を回想して書いたエッセイ「雑誌『フリーウーマン』」の中で、「雑誌の内容は重要とはいえ、形式も素人風のもの」であったとコメントしているが、寄稿者、投稿者の中には H. G. ウェルズ (H. G. Wells) やジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy)、ドロシー・リチャードソン (Dorothy Richardson)、ステラ・ブラウン (Stella Brown) もいた。

「素人風」な形式とはいえ、有識者をまじえて「女性参政権運動」「(性同一障害を含む)性の問題」「女子の高等教育」「独身女性問題」「帝国と母性」「人口論」「金融論」「性心理学」「優生学」「衛生学」「売春婦問題」など多岐にわたる議論が展開されていて、ヴィクトリア朝から新世紀への転換期の精神風土が直に伝わってくるようである。

本論ではフェミニスト雑誌『フリーウーマン』からモダニスト雑誌『エゴイスト』への経緯について書かれたレベッカ・ウエスト (1892-1983) のエッセイを翻訳して紹介することで、20世紀初頭のフェミニストたちがどのようにモダニズム運動に関わっていたかをみたい。一言付け加えるとすれば、レベッカ・ウエスト自身がエッセイの中で述べているように、上記のエッセイは編集の仕事辞してからかなりの年数がたって書いたもので、記憶があいまいになっていることである。特に後者の「独身女性パトロンとして活躍」を書いた時は78歳という高齢に達しており、ハリエット・ショー・ウィーヴァーがパトロンになったのは、『フリーウーマン』ではなく『ニュー・フリーウーマン』の誤りである。なお前者の「雑誌『フリーウーマン』」の中で、ウエストがレイチェル・イースト (Rachel East) というペンネームでドーラ・マーズデンに異議を申し立てた投書記事は『フリーウーマン』(No.42, Vol.II, September 5, 1912, p.313) に掲載されている。

I. "The Freewoman" by Rebecca West 試訳

{ Scott, K.M. (ed), *The Gender of Modernism: A Critical Anthology*. Bloomington }
{ and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1990, pp.573-577. }

雑誌『フリーウーマン』

雑誌『フリーウーマン』についての記事を書くように依頼されました。依頼した人たちは知識人ですが著名な人物ではありません。雑誌の内容も重要とは言えず、形式も素人風のもので、その時代に計り知れないほどの影響力を持っていました。しかし残念なことに、私はこの雑誌のことはほとんど忘れてしまいました。15年か16年前に出た雑誌だったと思います。私は当時17、8歳でした。その後私はあまりにも色々なことをしており、その雑誌に

関わる人たちとすっかり疎遠になってしまったので、記憶がぼんやりとして細かいことは忘れてしまったのです。

雑誌『フリーウーマン』はドーラ・マーズデンによって創刊されました。彼女は英国きってのすばらしい人物でした。まず第一にあげられることは、この上なく美人だったことです。小柄で子どもほどの背丈をしていましたが、ただ単に小柄だというのではなくて、まるで妖精のように均整の取れた美しい肢体をしていました。生涯出会った人物の中で「まるで花のような」と形容できる唯一の人物でした。パスポートにはさんで取っておきたいような花なのです。この他にも彼女には秀でたところが多くありました。仕事においては並外れた成功を収めました。まだ30歳にもならない時に教員養成学校の校長をしていたほどです。パンクハースト夫人の下で戦闘的な女性参政権運動の一員として活動してもしました。そこで彼女の勇気ある行動は、そのグループの勇気ある人たちさえも驚かせました。投獄されたことも一度ではすみませんでした。どんな女性でも周囲の人をはっとさせるような英雄的行為をすることがありますが、華奢で病弱な彼女にはどこか人並みはずれたところがありました。

マーズデンは雑誌『フリーウーマン』を創刊しようと考えました。参政権運動の活動範囲の狭さに不満を抱いたからです。参政権運動は目的を選挙権獲得のみに限った運動であり、フェミニズムという広範囲な問題を扱っていないと考えたからです。パンクハースト夫人とその娘たちや一般の参政権運動家を非難するあまりに、彼女がこのような考えに至ったのは間違いだと私は思っています。なぜかというところ参政権運動家はただ自分達の仕事を忠実にこなしてただけであり、その仕事に専念してただけだからです。しかし、誰かが参政権運動を傍らながめて、フェミニズムについて熟考する必要は確かにありました。この役割りを担うにあたってマーズデンはメアリー・ゴースープという支援者を得ました。ゴースープはヨークシャー出身の女性で、参政権運動で体調を崩していました。というのも政治家の集会でウインストン・チャーチルが演説しているところを妨害し、警備員につまみ出されて怪我をしたためです。ゴースープは陽気な戦略家で全国を行脚していました。週15から20ポンドの安宿に泊まり、野外集会で一日に数回演説し、英国の大都会で有力者を説き伏せようとして、バカな真似をして物笑いになったりしたこともあります（このことが一番辛かったようです）。時には監獄で休息をとり、ツバメのように元気はつらつとして飛び回っていました。ゴースープには天才ともいえるほどの機知と常識と勇気がそなわっていました。現在はアメリカ合衆国に移り住んでいますが、彼女の思想は色あせることなく、今もなおここ英国のあらゆる世代の女性に受け継がれています。

マーズデンとゴースープの二人が『フリーウーマン』を企画したのですが、最初から最後までこの雑誌の運営の中心的役割りを果たしたのはドーラ・マーズデンの方でした。なぜならゴースープはその頃病状が思しくなかったからです。

ドーラ・マーズデンは献身的な友人であるグレイス・ジョーダンとともにロンドンに出てきました。二人の関係はまるで聖書のマルタとメアリーのようでした。二人は資金を提供してくれる出版者を見つけました。この点に関してぜひ覚えていただきたいことは、過激な運動家は非常識な人物から財政的な援助を受けざるを得ないということです。彼らは、これは過激でない運動家の場合も同じなのだからとあきらめていたのです。しかしながら、このような運動と出資者のあいだに対立がないということには問題があります。この風変わりな出資者は『フリーウーマン』を支援したのみならず、チェスタトンとベロックの『目撃者』にも出資し、さらにまた派手なブーツをはいた金髪の美女が編集する服飾雑誌にも出資していたのです。彼女のダンス靴は時を経ても輝きを失わず、今でも私の脳裏にやきついていきます。映画の方は評価されませんでした。彼女はセシル・ド・ミル氏のアニマ（女性的な内面）には気付いていました。ミル氏は自分の書いた詩も出版していました。ワーズワース風の自然詩やブラウニング風の魂を唄ったモノローグなどです。私が記憶している詩は聖オーガスティンが彼の禁欲について嘆くという心打たれる詩です。彼はまた寛大な心で様々な若い人気作家の本を出版しました。その中にはキャサリン・マンズフィールドの最初の短編集『ドイツの下宿にて』があります。ともかく私たちは雑誌の編集を始めたのです、というか始めさせられることになったのです。私が編集に加わったのはしばらくしてからです。私が始めて『フリーウーマン』に投稿したのは、あまりにもあからさまな表現があるとの理由で、家族から読む事を禁止されていた頃でした。そういう事情でその時から現在のペンネームを使うようになったのです。出発当初のメンバーは、ドーラ・マーズデンとグレイス・ジョーダンそしてローナ・ロビンソンという名前の赤毛の科学者で、彼女は問題をおこしては監獄に入ったり出たりを繰り返していました。最初は伝統に則って忠実にフェミニストの記事を書いていました。初期の頃の記事を読んでも、全国女性参政権協会の運動とほぼ同じ活動をしていたと思われれます。マーズデンたちの事業は、次世代の英国女性たちに全くそのまま受け継がれました。今日の『タイム・アンド・タイド』のような穏健で正統派の女性週刊誌の購読者なら次のことを納得しない人はいないでしょう。つまり妻と子を養うことを、夫と彼の従業員に委ねる事は、女性の地位を下げることであり、人類を中傷することであると。このような事態を改善する方法についての意見はまちまちであるかもしれませんが、反対する人はまずいでしょう。人々の考え方がこのように変化したのは『フリーウーマン』の努力のたまものなのです。しかしこの雑誌が英国で成し遂げた一番大きな功績は、臆することなく大胆不敵に意見を述べたことです。これはクリスタベル・パンクハーストの成した功績に匹敵するものです。パンクハーストは性病についての論文で世界に計り知れないほど貢献をしました。論文の内容は知的とはとても言えないものですが、性病の蔓延という事態における男性のみだらさを非難し、また女性のみだらさや社会制度も性病を引き起こす原因に

なっていることを指摘しました。性病について声を大にして、はっきりと繰り返して、あからさまに訴えたので、英国全体がショックで倒れそうになったほどです。そこで専門家が出てきて、この問題が指摘された以上、国家はこれに立ち向かい性病を防ぐべきだと話す声に、英国国民は気を取り直して静かに耳を傾けました。それでもなお『フリーウーマン』はセックスについて声だかにきっぱりと、繰り返し書き続けました。気品のない書き方で、内容も同様に学術的なものではありませんでした。フロイトやユングなどは新しくも何ともないと言う現代人は、この雑誌の記事などに見向きもしないでこう考えるでしょう。たとえそれらが誠実で知的な人が書いた記事であっても、何とぞこちなくてつまらない議論をしているのだらうと。しかし『フリーウーマン』はその率直さによって世間の人々の心をゆさぶり世界に計り知れないほど貢献したのです。これは女性に対するロマンチックな概念と闘ったり、女性の自立をただ単に訴えるような運動にはとうてい成し得なかったことです。独身で子どものいない多くの女性は自分達の境遇に不満をもっていることを指摘しました。また、結婚していて子どもがある女性の多くも自分達の境遇に不満をもっていることを指摘しました。性的異常者が存在することさえ取り上げました。実際、女性が生まれつきどんな境遇にも適応できるというロマンチックな幻想を打ち砕いたのです。当時は、女性というものは性欲を持たないで満足できるおとなしい存在であり、美人なら女神様を連想させるし、美人でない場合は一人では生きていけない人間だと男はみなしていたのです。仮にこのロマンチックな概念が事実であったのなら、女性の解放などというものはする必要はなかったでしょう。ともかく女性はどんな境遇にも適応できて幸福だったということになりますから、環境を変える必要などまるでなかったはずですが、しかし実際のところ女性は苦しんでいたのです。男性によって人生が決まってしまうことがたまらなく嫌だったのです。女性が自分の人生をどう生きるかを自分の力で決定できなければ、苦しみから抜け出せなかったことを理解しなければなりません。このことを認識することが現在のフェミニスト運動の根本的課題なのです。

ドーラ・マーズデンは自分の意見を独特の方法で効果的に紙面で述べました。雑誌は継続するものと考えてのことでした。にもかかわらず雑誌は行き詰まり、事実上廃刊になりました。廃刊に追い込まれたのは、ドーラ・マーズデンが哲学的思考を書き始め、やがて自分の形而上学を説いたからです。女性の職業を男性と同等にしたいという情熱が消えてしまったのです。なぜなら産業主義は、生活を創造するよりむしろ破壊していると考えに至ったからです。現代文明に懐疑的になり、トルストイ流の思想を説き始めたのです。これは社会を原始的な農業社会に戻すというものでした。この問題に関して私は読者欄で彼女と論争しました。興味ある方は記事を探して見てください。レイチェル・イーストというペンネームを使って投書しています。私はマーズデンを説得することはできませんでした。なぜならマーズデンはどんどん自分だけの思想にはまり込んでいて、マックス・スターナーの影響を受け

て自己中心的な哲学をうちたてていたからです。出版社が破産したのはこの頃でした。経営者が、ある事業主から騙し取った相当な額の投資金を持って、身分の高い女性とともに、突然北アフリカに逃亡してしまったのです。その時になって、彼は奇異な犯罪者だったということが分ったのです。本当に単細胞のばかな男だったのです。金銭に関わる様々な奇怪な行為をしたり、思いつきでうっかり二重結婚をしてしまった後、スコットランド・ヤードにある警察所からほんの一マイルの場所で一人の出版者になりすましていたのです。それからそこで二年間仕事をしたのです。若い人気作家に大金を使ったり、身分の高い女性と危険な海外旅行をしなければ、きっとその先何年も仕事を続けていたことでしょう。

その男はアフリカから連れ戻されて、何年間か僻地に送られました。チェスタトン氏やベロック氏そしてドーラ・マーズデンたちはしばらくの間、居場所を失ったのです。それから変わり者が現われて財政的援助を申し出てくれました。雑誌は『エゴイスト』という題名で再発行しました。私はそこで文学の編集を担当することになりました。『エゴイスト』は長くは続きませんでした。仕事を続ける事は不可能なように思われました。職場の日常業務もうまく機能していませんでした。成り上がり者のアメリカ人の詩人が一人いて、私を追い出そうとしていたのです。その詩人の詩や彼の友人の詩が私の許可なしで、雑誌に連載されました。あの年頃の私には、とうてい我慢ができないことでした。ドーラ・マーズデンは、遙か彼方の手の届かないところで思索にふけていました。それで私が文学的的技巧においても、味わいにおいてもある水準に達していない作品を掲載することに反対だと言っても、マーズデンには理解してもらえませんでした。それで私は職場を去ったのです。マーズデンには私が辞職した理由など決して分ってもらえなかったでしょう。文章と、その文章に表現されているものとの間には関係があって、一方が粗雑であれば、他方も本物とはいえないのではないかという議論など、マーズデンは、遙か彼方から聞こえてくる騒音程度にしか思っていなかったようです。自分の考えを行動で表すことがだんだん億劫になってきていたのですから。彼女はもはや「運動」についてではなく、「存在」についての論文を書いていたのです。

『エゴイスト』は私が辞職してからもしばらく続きました。この雑誌社は、ジェームス・ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』を出版するという文学界での偉業を成し遂げました。『エゴイスト』が廃刊になる頃のことについてはお話しすることができません。というのも私は健康を害して長期間仕事から離れていたからです。ドーラ・マーズデンについては10年ほど何の情報もありませんでした。彼女が得た学識は人に伝えられるようなものではなかったのかも知れません。きっとただ一人で超越した見識に達したのだと思います。構成員の一人が突出してしまって、仲間に偉業を伝えられないとしても、そのことは人類にとって悪いことではありません。ともかくドーラ・マーズデンは私たちの生きた時代に、確固たる信念を持って一つの遺産を残してくれたのですから。

II. "Spinster to the Rescue" by Rebecca West 試訳

{ Scott, K.M. (ed), The Gender of Modernism: A Critical Anthology. Bloomington }
{ and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1990, pp.577-580. }

「独身女性パトロンとして活躍」

ハリエット・ショー・ウィーヴァーは文学を志す人たちには、人間の姿をしたバーナード犬として知られています。というのは、ジェームズ・ジョイスをアルプス山中でみまわれた不運の嵐から何度も救助したからです。

ジョイスへの貢献はたいへんなもので、細やかで控えめなこの未婚女性がいなければ、ステューブン・ディーダラスやレオポルド・ブルームが世に出られたかどうか疑わしいものだと言っても過言ではないからです。彼女は立ち居振る舞いや話す言葉が上品なうえに、厳格な禁欲主義者でしたので、酔っているのではないかなどと非難されると、怒りで目に涙をかべ夜も眠れなくなるほどでした。

なぜジョイスを支援するようになったのかは、『親愛なるウィーヴァー様』(Faber, 90's)に詳しく書かれています。従姉妹のジェーン・リダーデイルとメアリー・ニコルソンが書いた伝記です。とても風変わりな内容の本です。

話は1911年に始まります。それはウィーヴァーがフェミニストの雑誌『フリーウーマン』と関わりを持った年でした。当時19歳で編集長補佐をしていた筆者が、公正な立場から申し上げても、『フリーウーマン』はとても優れた雑誌でした。

編集長はドーラ・マーズデンという女性で、マンチェスター大学出身でした。サフラジェット(戦闘的女性参政権運動家)として投獄され、ハンガーストライキをして強制的に食事をのどに流し込まれるという経験をしていました。聡明で、まるで聖人のような性格をしており、その上、本誌に掲載されている写真から分るようにとびきりの美人でした。

文学部門の編集長には、当時20代後半のアメリカ人の詩人で学者のエズラ・パウンドが就任しました。フォード・マドックス・フォードとヴァイオラ・ハントという、才能ある熱心な世話役の熱心な薦めで、編集長補佐が連れてきたのです。

パウンドは立派な容姿をしていました。一世紀前の北米英植民地にいるダンディのような服装をしていました。まるでマーラーレードジャムのビンから出てきたかのように肌が艶々していて、髪は赤毛でした。志は鋼鉄のように硬く、『親愛なるウィーヴァー様』に書かれているように、彼の友人までもが意欲をかきたてられるほどでした。

まもなくもうひとりのすばらしい才能を持った19歳の若者が編集に加わりました。リチャード・オールディントンです。彼もフォード・マドックス・フォードとヴァイオラ・ハントが

見つけてきた人材でした。

雑誌の企画内容は女性運動、哲学的アナーキニズム、また生き方や芸術を改革するための構想を募るといようなものでした。長期間継続して出版されていれば、もっと多くの問題を取り上げていたでしょう。ハリエット・ウィーヴァーが事務所に訪ねてきたのは、『フリーウーマン』こそが彼女の求めていた雑誌だったからです。

ウィーヴァーはその当時35歳でした。田舎の医者の娘で、母親は綿糸工場を営んでいた父から莫大な遺産を相続していました。そのお金で父親は家族を連れて英国北部を離れ、ハムステッドの立派な家に移り住んだのです。彼は医者をやめて、宗教団体の名士になりました。娘が成人して医学を学びたいと言い出すと反対し、日曜学校の先生にさせました。

25歳になると日曜学校の先生をやめ、貧民街で献身的に子どもたちの世話をしました。憐れみなどからした社会奉仕ではありません。彼女は生まれつきの改革家で、社会の底辺を変えることだけを望んでいたのです。

両親も亡くなり一人きりになった時だったからこそ、ウィーヴァーは社会の底辺を変えること、このことだけに専念したくて私たちの仕事を手伝いに来たのです。

彼女は性に対しては全く無関心でした。『親愛なるウィーヴァー様』の著者の風変わりな表現を借りれば、彼女は「人間として以外には、異性には全く関心を示しませんでした」。しかしある日、彼女が『アダム・ビード』を読んでいるのを見つけるや、母親は彼女を自室に閉じ込めました。ジョージ・エリオットが小説に書いたようなみだらな行為は、口にするのも汚らわしいと考えた母親は、まるで水漏れの修理を依頼するような素早さで牧師を呼びつけて娘に説教してもらいました。

ウィーヴァーはフェミニストの説く福音に喜んで耳を傾けました。たとえ（露骨な表現ではないとしても）性の解放についての話にも耳を傾けました。銀行・通貨改革連盟のアーサー・キトソン氏の経済に関する一連の記事には特に関心を寄せました。彼は投資というのは、高利貸しのしていることと何ら変わらないと非難したものですから、ウィーヴァーは相続金を預けて得た利息を受け取る権利など自分にはないのではないかと疑い出したのです。利息は、自分で働いて得たお金ではないので、高利貸しが手に入れるお金と同じなのではないかと考えたからです。

このエピソードは、確かな筋のうわさによると、『フリーウーマン』に掲載されたキトソン氏の記事をたとえほんの少しでも読んだ読者が一人はいたことの証明になったそうです。その証拠にあって驚く事が起きました。ウィーヴァーが『フリーウーマン』のパトロンになったのです。この雑誌は間もなく、かの有名な『エゴイスト』へと発展しました。

彼女は編集長のパトロンになりました。雑誌の記事すべてを彼女が預かり、そのいくつかを雑誌に掲載しました。マーズデンが哲学と社会学を融合させて、様々な問題を論じた論文

も掲載しました。

エズラ・パウンドから天才小説家ジェームズ・ジョイスの未発表小説の話聞いたウィーヴァーは、『若き日の芸術家の肖像』を雑誌『エゴイスト』に連載するよう取り計らいました。その後ジョイスのエージェントになり、彼の小説の出版を引き受け、友人として出資するなど可能な限りの支援をしました。長年にわたる付き合いの中で、問題を抱えていたジョイスの娘の世話までしてあげました。

パトロン以上の世話をしたのです。実際、聖人のようなパトロンでした。ジョイスは絶えず、特に晩年はウィーヴァーに反抗しました。『親愛なるウィーヴァー様』の著者は次のように書いています。

彼女はジョイスの「進行中の作品」が出版されるまでどんな努力も惜しまないと約束しました。ジョイスは以前にもそうしたように、今回も彼女の申し出を受けました。こうすることで、彼は目には見えない内なる「感謝」の印を示したのです。

彼女は本当に優しい人でした。しかし彼女が最後に支援する相手として選んだのは、一人の人物ではなくて一つの党であったことも理解できます。彼女は最後の約25年間敬虔な共産党員として生涯を送ったのです。

私が編集長補佐としてウィーヴァーに会ったのはたったの一回であったと伝記には記されています。それはとても心動かされる出会いでした。というのも出会った場所はハムステッドの邸宅だったからです。銀行から利息を受け取る事は恥だとして、権利を放棄したために22年間住んだその家を出て行かなければならないところだったのです。庭のスギの木を見つめている姿はまさに殉教者のようでした。悲しい出会いでした。

ウィーヴァーは決して頭の悪い人ではありませんが、理解力に問題があったように思われます。世間知らずだったのです。本当のことを言えば、偉大な出資者であるウィーヴァーからお金を受け取るのは申し訳ないことだったのです。

ウィーヴァーは立場の異なる人に見境なく経済的支援をしていました。彼女はジェームズ・ジョイスもドーラ・マーズデンも同等に賞賛していました。マーズデンはかつては聡明な人でしたが、才能が枯渇して最後は闇の中に消えてしまいました。そのずっと前より彼女の論文はすでに降霊術会に操られているかのような内容になっていました。しかしウィーヴァーは最後までマーズデンを支えました。最後の論文は、天地創造の神の契約について論じた「真理の書」として発表されました。その論文でマーズデンはこう述べています。

その時、神はあなたに私を助けるようにしてくださいました。ほぼ半世紀にもわたっ

てあらゆる方法で、驚くべき手助けをしてくださいました。この後50年間も私を助けてくださるような気がします。

たとえ『フリーウーマン』の哲学的アナーキズムの影響を受けたからと言っても、ウィーヴァーが伝記に記されているように、ごく単純な動機で、いとも簡単に共産黨員になってしまったのは不可解なことです。また、彼女の友人で長期間協力者であったエズラ・パウンドが、ムッソリーニと関わりを持った時に、何の嫌悪感も示さなかったということにも納得できません。

しかし、ウィーヴァーがジョイスを経済的に支援したことは明かに大きな功績でした。伝記が出版され、彼女の経歴が明らかになった今、彼女がアーサー・キトソンの書いた預金利息に関する記事に身をもってみごとに反駁することになったとは皮肉なことです。彼の記事がウィーヴァーを『フリーウーマン』の事務所に送りこみ、その雑誌を創刊させることになったのですから。

もちろん、働かずに得る収入は必要なのです。余分なお金は気まぐれな宇宙と歩調を合わせて、風変わりな人物をあちらこちらに赴かせ、あれをさせたり、これをさせたりするものです。そしてたまには「賢者の石」ともいえるようなものを見つけることだってあるのです。

『サンデー・テレグラフ』1970年11月11日号、p.12



図1 ドーラ・マーズデン (Dora Marsden)

THE FREEWOMAN

A WEEKLY HUMANIST REVIEW

No. 42. VOL. II.

THURSDAY, SEPTEMBER 5, 1912

THREEPENCE

[Registered at G.P.O.]
as a Newspaper.]

Editor:

DORA MARSDEN, B.A.

CONTENTS

	Page		Page		Page
THE POLICY OF THE FREE-WOMAN	301	POLICE SYSTEMS AND ORGANISED CRIME. By Donald Campbell	310	Strindberg, Rebecca West, and Loneliness	314
THE KING. By Rebecca West	306	NOTICE TO THE READERS OF THE FREEWOMAN	311	The Case of Penelope	314
THE TRUE INWARDNESS OF DIVORCE. By Charles J. Whitby	307	CORRESPONDENCE:		"The Remedy"	316
WILL MEN GOVERN WHEN WOMEN HAVE THE VOTE? By C. H. Norman	308	The Policy of THE FREE-WOMAN	312	Forcible Feeding	316
CURRENCY AND CO-OPERATION. By Arthur Kitson	309	The Normal Social State	312	The Forcible Feeding of Mrs. Leigh	318
		Work and Life	313	The Causes of Usury	318
				State Banking and Currency v. Competition	318
				Forcible Feeding Memorial	319

THE POLICY OF "THE FREEWOMAN."

WE draw special attention to our correspondence columns this week. They largely amount to an unbroken challenge of THE FREEWOMAN'S policy. That is as it should be. It remains for us to reply to this challenge. We will begin with Mr. Wells, though what he criticises is the lack rather than the presence of a policy in THE FREEWOMAN. He likewise objects to Labour-Conscription being classed with Guild-Socialism. Let us consider the latter first. It is to our profit to examine Mr. Wells's arguments closely, since it is just upon these differences between tweedledum and tweedledee in collectivist theory—such differences as exist between "Labour-Conscription" and "Guild-Socialism"—that Socialist energy is turned. Rank-and-file Socialists think there is a great intellectual contest to the fore, though what it turns on they would be at a loss to say. The editor of the *New Age* refers to Guild-Socialism as though it were something he had discovered, experimented with, proved and laid on the market like some patent medicine; the "remedy, now well known," is how he refers to it, whereas in reality he has never dared to run the risks of describing it in blunt terms for the thing it is—a union of two bureaucracies, the bureaucracy of an enormous Trade Union administered by elected officials in alliance with the bureaucracy of the State, likewise administered by elected officials. Thus, Guild-Socialism, instead of having one principle of corruption to deal with, will have two, of which for preference there would not be a pin to choose. The only detailed feature of this social panacea is that the mob will receive graduated pay, graduated, we must suppose, by the elected officials. Now we venture to say that the Labour-Conscription of Mr. Wells's Great State did not differ in essence from Guild-Socialism. Firmly, if gently, we repeat the statement, for though behind Mr. Wells's scheme there is better feeling, inasmuch as he

eliminates labour class distinctions by making the community as a whole labouring class, it remains pre-eminently bureaucratic, and no amount of economic, genealogical tables, worked out *on paper*, can prove anything to the contrary, any more than labelling our boxes the West Indies, where the sun has been shining all summer, can guarantee us a holiday there. One can write out anything on paper; but the only truthful thing that can be said of human beings, either on paper or off, is that they must feel themselves free—ungoverned, in fact—or they will feel enormously unhappy. But the very essence of a conscript labour community is Government: Government to initiate the conscription, Government to enforce it, Government to administer its services, to estimate its duties, to apportion the labour, to conduct the lotteries, to send out the blue papers, to decide the pay, and to pay it; in short, with Labour-Conscription between each primitive need of our nature and its satisfaction stands this spectre of Government. And in defence Mr. H. G. Wells offers us—a diagram!

* * * * *

The explanation of this strange matter is that latter-day thinkers are so hypnotised by the adoption of machinery that they set up the most preposterous theories, the application of any one of which would make the mind reel with horror. They are seeking a way out—*any way*. With the Devil at the heels of them and the precipice in front, they are prepared to jump and risk how they fall. It is as a consequence of the Devil's wiles that it does not occur to them to turn round and grapple with the fiend himself, and hope to walk over his defeated form to happiness and safety.

Mr. Wells accuses us of having no "constructive" theories. What does "constructive" mean, applied to life? It would be so much to the good if we could persuade even great novelists to be precise in their terms, especially when things which matter are presumably to hang on them. To our thinking,

THE NEW FREEWOMAN

AN INDIVIDUALIST REVIEW

Published on the 1st and 15th of each month.

No. 1. Vol. 1.

JUNE 15, 1913.

SIXPENCE NET

CONTENTS

EDITOR:
DORA MARSDEN, B.A.

	PAGE		PAGE		PAGE
THE LEAN KIND	1	THE ECLIPSE OF WOMAN. By		THE GOLDEN AGE. By Huntly	
VIEWS AND COMMENTS	3	F.R.A.I.	11	Carter	16
TREES OF GOLD. By Rebecca West	5	CONCERNING FREE LOVE. By Theodore Schroeder	12	CORRESPONDENCE, Personal Rights. By J. H. Levy	17
SOCIAL ATAVISM IN CALIFORNIA. By R. W. Kauffman.	7	TWO TESTAMENTS. By BENJ. R. Tucker	15	EVE. By Horace Holley.	18
MIND AND MOVEMENTS (WOMAN'S NEW ERA). By FRANCIS GRIENSON.	10				

THE LEAN KIND.

This is the epoch of the gadding mind. The mind 'not at home' but given to something else, occupied with alien 'causes' is of the normal order, and as such must be held accountable for that condemning of the lonely occupant of the home—the Self—which is the characteristic of the common mind! With the lean kind—the antithesis of those 'Fat' with whom latterly we have become so familiarised—the most embarrassing notion is that of the possession of a self having wants. To be selfless is to have attained unto that condition of which leanness is the fitting outcome. Hence, the popularity of the 'Cause' which provides the Idol to which the desired self-sacrifice can be offered. The greater the sacrifice the Idol can accept the greater is it as a 'Cause,' whether it be liberty, equality, fraternity, honesty or what not. If ten thousand starving men, with their tens of thousands of depeñdants, starve in the Cause of Honesty, how great is Honesty! If a woman throws away her life for freedom, how great is freedom! And no mistake.

'Great is the Cause and small are men,' is the creed of the lean kind. Consider the Cause of Honesty—the righteous frenzy for the maintenance of the status quo in regard to property. True it is that all worshippers of honesty have no property, but what of that: the greater the sacrifice: good is it to be a vessel of dishonour if thereby is achieved the greater glory of the Cause.

It is true one may choose one's 'Cause,' but choice appears to fall fairly uniformly into classes, and as for the lean kind, they choose honesty. 'Poor but honest,' is the lean one's epitaph. He makes it his honour to see to it that property shall remain 'just so.' He will fight and die and play policeman with zeal, that property should remain just so! There have been those, however, who have maintained that 'Property was theft.' Monsieur Proudhon said so, and Monsieur Shaw supports him. 'The only true thing which has been said about property,' says Mr.

Shaw. We—and the lean—beg leave to dissent, what though in dissenting, we differ. The lean scout the base notion, for where would the Cause, Honesty be if horribly it should prove true? It is therefore not true for the lean. And for us? If the pick and the shovel are the discovered gold, then property is theft. But if the shovel and pick be as a means to an end—the acquiring of gold—then theft is to property in the same relation. Theft is the time-honoured, success-crowned means to property. All the wholesale acquisitions of property have come, do come, will come, in this way. Whether Saxon robs Celt, and Dane robs Saxon, and Norman robs all three: whether William Shortlegs robs the English to give property to his fellow-bandits, or bandits, grown bolder, rob the Church for themselves, or the Trust-maker robs whom he will, the process is one and the same. A constant state of flux (Oh, Cause of Honesty!) flux of property, from hands which yield into hands which seize! Small wonder the lean kind love not this truth, and cover their eyes with their Cause. Hands which seize are not their kind of hands; the spirit of their Cause makes the muscles relax and the grip grow feeble.

Property once seized, the seizers set about to make flux static. They declare a truce. They send forth a proclamation: 'Henceforth the possessed—we and our children—must remain possessors: and the dispossessed remain the dispossessed—for ever: these shall not raise disturbing hands against the state of things: should they, the STATE will visit upon them the penalties due.' For notice: In the process of proclamation, the victors have taken the proclamation for the deed; they have not merely said 'this state, now established, shall remain,' they have said, without pause for breath, 'this shall be' and 'this is,' 'The State now is—and we, are the State.' And so it turns out. The dispossessed—the lean—make answer: 'Yea—great conquerors, as you say, so it is.' The STATE

THE EGOIST

No. 2.—VOL. IV.

FEBRUARY 1917.

SIXPENCE.

Editor: HARRIET SHAW WEAVER.

Contributing Editor:

Assistant Editors: { RICHARD ALDINGTON.
H. D.

DORA MARSDEN, B.A.

CONTENTS

	PAGE		PAGE
OBSERVATIONS PRELIMINARY TO A DEFINITION OF "IMAGINARY." By D. Marsden	17	THE FUTURE OF AMERICAN HUMOUR. By Yone Noguchi	25
PYGMALION. By H. D.	21	ENVY. By F. S. Flint	26
JAMES JOYCE. By Ezra Pound (with Woodcut by Roald Kristian)	21	PASSING PARIS. By M. C.	28
AUTUMN RAIN. By D. H. Lawrence	22	EZRA POUND. Translated from the French of Jean de Bosschère	27
THE EXILES. By Madame Goltkowska	23	SERIAL STORY—TARR. By Wyndham Lewis	29
THE CHILD. By May Sinclair	24	CORRESPONDENCE: Dreiser Protest	30

VI. OBSERVATIONS PRELIMINARY TO A DEFINITION OF "IMAGINARY"

By D. MARSDEN

1

THE difficulties standing in the way of a satisfactory definition of *imaginary* very greatly exceed those presented by the term *real*, which was the subject of our last study. The reason is that the activities with which the latter is concerned, i.e. *whether a name has been rightly or wrongly applied to a given phenomenon*, can be expressed in terms which are comparatively superficial. The term *imaginary*, on the contrary, embodies a distinction between vital activities so basic that an adequate consideration of them forces a definition of the term *life* itself. That is, the ontological questions which, with anything approximating to skill one might successfully evade in considering *real*, become the ever-present substance of one's care in considering *imaginary*. It is perhaps desirable therefore to state our motive for insinuating a study of *imaginary* between *real* on the one hand, and its opposite, *illusory*, on the other. Our justification is, that in order to close up certain leakages of meaning in the term *real* itself it is necessary to do so. There exists a loosely held but widespread assumption, which psychologists themselves show no anxiety to undermine and to which indeed the perfunctory manner in which psychology deals with *imagination* is directly due, that the *imaginary* stands in some sort of antithetical relation to the *real*.

Yet that such assumption is erroneous is easily demonstrable. There is nothing in the meaning of either term to render the one exclusive of the other. On the contrary, both can be, and are, simultaneously applied to one and the same image: as when we quite correctly say of an image, "*It is really imaginary.*" The two terms do bear a close relation to each other, but it is not one of antithesis. The actual antithesis of *real* is, as we have already indicated, the term *illusory*.

(2) The first preliminary to our study then will be

to indicate precisely what the relationship between *imaginary* and *real* is. It will be found that the ground has already been partly covered in our chapter on the *real*. It will moreover be further covered in connexion with *illusory*. At this point therefore we shall merely have to state the relationship in its categoric form. *Thought is a special mode of application of the powers of imagination*. When we think, we use imaginary images in a particular way. The element which distinguishes thought-inspired activity as against instinctive activity is the imaginative one; and men's minds have rightly apprehended the facts of the situation when they, speaking of the power of thought in general, usually intend that one shall understand thereby *imagination* rather than *thought* as the more characteristic and inclusive term.

(3) The characteristics which distinguish thought and imagination from each other can be reduced in words to very modest dimensions, though their issue in action involves all the difference which lies between the *imaginary* and the *real*. For thought produces the last and imagination the first. We will state the difference thus: In *imagination* the imaginary image combines with like imaginary images. In *thought* imaginary images pair, one by one, each with its corresponding *external* image. Thinking is therefore the interlacing of the *imaginary* with its external counterpart (as presumed). If when the latter is subjected to certain standard usages such presumption proves itself justified, upon the external image is superimposed a distinctive label. As product half of the imaginary and half the external it now constituted a *realized* image. In such manner does the imaginary image intertwining with the external call into existence the world of reality. After a like manner also does it create that of illusion.

(4) When we compare external with imaginary images, we find many common points of likeness. Both alike are *felt*. Both show liveliness and strength and both are equally capable of showing aspects of

参考文献

- Miller, J.E. *Rebel Woman—Feminism, Modernism and the Edwardian Novel*. Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1997.
- Campbell, K. (ed.). *Journalism, Literature and Modernity: From Hazlitt to Modernism*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press, 2000.
- Scott, K. M. *Refiguring Modernism, Vol. I The Women of 1928*. Bloomington and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1995.
- Scott, K. M. (ed). *The Gender of Modernism: A Critical Anthology*. Bloomington and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1990.
- Richardson, A. & Willis, C (eds.). *The New Woman in Fiction and in Fact: Fin-de-Siècle Feminism*. New York: Palgrave, 2001.
- Morrison, M. S. *The Public Face of Modernism: Little Magazines, Audiences, and Reception 1905-1920*. Wisconsin: The Univ. of Wisconsin Press, 2001.
- Weeks, J. *Sex, Politics & Society: The regulation of sexuality since 1800, Second Edition*. London: Longman, 1996.
- Kolocotroni, V., et al (eds). *Modernism: An Anthology of Sources and Documents*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press, 1998.
- West, R. 'The Freewoman.' *The Gender of Modernism: A Critical Anthology*. K. M. Scott (ed). Bloomington and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1990.
- West, R. 'Spinster to the Rescue.' *The Gender of Modernism: A Critical Anthology*. K. M. Scott (ed). Bloomington and Indianapolis: Indiana Univ. Press, 1990.
- Rowbotham, S. *A New World for Women—Stella Browne: Socialist Feminist*. London: Pluto Press, 1977.
- Lidderdale, J. & Nicholson, M. *Dear Miss Weaver: Harriet Shaw Weaver 1876-1961*. London: Faber and Faber, 1970.
- 出水純子. 「モダニズム運動の原動力となったフェミニズム雑誌 *The Freewoman*, 『大谷女子短期大学紀要』第48号、2004年12月.